

人生 仕事

女優 浅利香津代さん(71)

▶▶▶ 3

談

方言女優として脚光 せりふ指導にも熱

らの現代劇をやっています。家永三郎の教科書裁判など社会問題を扱った作品も多く、私も役を頂いて全国各地の巡業公演に明け暮れる日々でした。

28歳の時、歌舞伎を演じる劇団「前進座」の子ども・青年劇場公演に客演参加しました。その魅力で日本文化、和の芸能に目覚めたんです。「前進座に入らなにか」と制作の方に言われ

うたん(76年)に出演。本格的なテレビの仕事は初めてだった。浅利さんはヒロイン浅茅陽子さんの2番目の姉を演じ、「方言女優」として脚光を浴びた。

喜怒哀楽を母音に

大正時代に飛行機で空を飛んだ秋田の女性を描いたドラマです。そのころ前進座には30歳ぐらいの女優が7人ほどいて、全員オーディエ

にきてたんへ」と。すぐに「それが欲しい」となって、他の出演者の方言指導まで頼まれました。

撮影現場では秋田弁の鬼となりました。出演者のせりふを秋田弁に直し、私が吹き込んだテープを一人一人に渡して覚えてもらい、指導する。私が演じる時は一人だけ流ちょうにならないうようにせりふを抑えた調子で話しました。

へ1963年に大学を卒業した浅利さんは劇団「新人会」に入り、舞台で活動を始める。

大役に次々抜てき

師事していた望月優子先生が「素晴らしい俳優がいるから」と新人会を勧めてくれたんです。当時は山本学さん、長山藍子さん、渡辺美佐子さんらがいらして、小林多喜二、三好十郎

て入団を決意しました。間もなく近松門左衛門の「心中天網島」の小春役に抜てきされました。幼いころから日本舞踊を習っていたし、数年前から義太夫も稽古していたおかげで、演出家からのせりふや所作の指導に何とかついていけたんですね。その後も次々と大役を頂きました。

30代になり、NHKの連続テレビ小説「雲のじゅ

イシオンを受けました。審査員が私に「秋田出身ですよ。秋田弁ってどんな感じですか」と聞くんです。「え?」と思いました。何しろ、恥ずかしくて絶対使わないように気を付けていた秋田弁ですからね。

この時はやはり仕方なく話しました。「あやくすばらぐでおぎったぐど、なんとすておぎったげ。まめだつたんすか。たまめは遊び

仕事が終わっても「秋田弁っていいねえ、フランス語みたい」と話題になりました。秋田のお酒は何がおいしいか聞かれて「新政」を紹介し、取り寄せてみんなに振る舞ったことも。実家でも大騒ぎだったみたい。パパ(祖母)はテレビの前に黒の紋付羽織姿で座り、「ほれ和子が座った、立った、しゃべった」ってやってたそうです。

多くの新聞社、週刊誌が私に取材に来ました。「地方にこそ文化がある」という時代になり、その時代性に絡んだのが雲のじゅうたんだったんです。私の背筋も伸びました。自分の地域性がはつきりし、秋田出身であることに誇りが持てた気がしました。

それからは方言を使う役は私の得意分野に。京都弁にしても高知弁にしても、秋田弁と同じように喜怒哀楽が母音に込められる。この方言も大好きで一生懸命勉強しました。

聞き手は生活文化部・成田浩一

次回(8月3日)掲載



「雲のじゅうたんの撮影現場で。(前列左から)中条静夫、浅茅陽子、語りの田中絹代、浅利さん

文化